
別たれた姉弟は今生で相目見えることは無いわけで

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別たれた姉弟は今生で相目見えることは無いわけで

【Nコード】

N7268N

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

意味は無い。理由は無い。名も無く全てが無い。在るのは強さ。屠る強さ。奪う力。それだけが在り、それだけしか無かった。両腕が双剣を振るい殺戮する。影が両腕を振るい虐殺する。血に塗れた両手が守るのは、唯一の肉親。あとは何も無い。その手が届く範囲は危険地帯。無い、無い、無い。『殺戮』と『魔王』の名を冠する男の物語。

戦場。

怒号。

熱気。

血の臭い。

振るいすぎて感覚が無くなってきた両腕。

走る、駆ける、駈ける。

酷薄な笑みを浮かべて人の波を走り抜ける。

目の前に立ち塞がる敵である人間を、血で塗られた細身の双剣で斬り捨てて。

血が舞う。血が地面を彩る。周りにいる人間が、自分達の仲間を斬り捨てた人間に目を向け、一瞬で顔に恐怖を映した。

「う、うわあああああつ!!」

反射だ。

恐怖から逃れようと、自分に恐怖を抱かせている黒衣の男を消そうと、両刃の剣を振り上げる。

だが、その攻撃は些か大振りすぎた。

先ほど敵を斬り捨てた黒衣の男は双剣の片方を、剣を振り上げている男とは見当違いの方向へ投擲する。

剣を手放したことに驚きつい目で行方を追ってしまった男は、そ

の剣が味方の喉に突き刺さるの見た。

そして、剣を振り上げた男の喉にも、ステイレットが突き立てられる。

鎧の隙間を掻い潜り、突き立てられたそれに男は兜の奥で目を見開く。

黒衣の男は笑みを歪め、ステイレットを手放し、次の獲物に視線を移した。

「ひっ……っ！」

あっさりと味方を殺してしまった男がこちらを見た。

否が応でも「次は自分」と悟ってしまい、逃げ腰になる。

それを見て取った黒衣の男は、凶悪に顔を歪めて、笑った。

細身の剣を一振り。鎧を物ともせずに、隙間から命を絶つ。

男は走る。

走ったまま剣を振るい、いとも簡単に命を屠っていく。

投げられた双剣の片方を回収し、己に斬りかかって来る者達を次々と倒していく。

一人だけで敵陣に突っ込んできた、鎧を纏わず、黒を纏う男。恐ろしい強さだった。

突き進む男を止めようと、兵士達が彼の前に出る。

人の間を縫えないように一人一人が密集し、人垣を作る。

流石に駆ける足を止めざるを得なかった黒衣の男が急停止し、剣を振るう。

足止めを食らっている男の背中に追い縋る兵士。

味方の命を食い漁った黒衣の男を、その命で清算させるために、卑怯とは分かりつつも無防備に晒された背中に剣を振るう。

剣が、舞った。

「……………あ？」

何が起きたのか分からなかった。

兵士は、自分の手の中に収まっていたはずの剣が無いことに顔を引き攣らせる。

黒衣の男ははまだ兵士に背中を向けていた。
向けてはいるのだが、何かおかしかった。

感じる違和感に兵士が気付く前に、黒が兵士の胴を薙ぎ、上半身と下半身で分断される。

血が、肉が、内臓が。ただの物のようにぶちまけられる。

「……………ははは」

黒衣の男が、抑えられないといったように。

「はははは、あはははははははっ……！」

笑う。嘲笑う。ゲラゲラ笑う。

男を取り囲んでいた兵士達は、我が目を疑った。

黒衣の男の影が、立ち上がったていたのだ。

輪郭がはつきりしない、人の形をした影がニマニマと笑いながら、一人の兵士を分断させた手をゆるやかに振っている。

嘘だ。

信じられない。

兵士達の胸中でそう呟かれる。

愕然とした顔で黒衣の男を見、誰かが恐怖に戦慄く声で叫んだ。

「アジタート……っ!!」

それを合図に黒衣の男と影がにんまり笑い、命を屠る作業が開始された。

黒衣の男の進行を止めるものはいない。
敵軍の頭を潰し、敵兵達は逃げていく。

黒衣の男は逃げる兵士達の背を追うでもなく、用は済んだとばかりに踵を返す。

逃げる兵士の一人が、恨みを存分に込めた目でその男を睨み、怨嗟を吐く。

『殺戮のアジタート』

黒衣の男はその言葉に笑い、どうしようもなく笑い、またどうしようもなく嘲った。

「それ、オレの名前じゃねーぞ」

己に名前は無い。

なのに、なんでそう呼ぶのか。

訳が分からない。そう、笑った。

男の足は、己が属する軍へと歩みを進める。

止められない。止められやしない。

黒衣の男の背後に控える影が、男の足元で笑った。

己が人生を憾んだことは無い。

恨み怨んだことはあるが、今はそれすらも無い。

無い。

オレには何も無い。

強さだけがある。

異端で異常で異物。

唯一、己が『守ろう』と思えるものは、一人の肉親だけ。

親は、残念ながら『守ろう』とは思えなかった。

両手を目の前にかざせば、そこには人間らしい、血の通った男の手がある。

洗っても洗っても落ちぬ血の跡が網膜に焼き付けられている。手に、血がべったりと引っ付いた幻覚が見えた。

回想する。

怨みの声で呼ばれる『殺戮のアジタート』。

アジタートとは、曲想に関する標語だ。

意味は『激しく、苛立つて』。

己の家系が音楽に携わることが多かったせいだろう。

これは一種の皮肉かもしれない。

音楽家の家系に生まれた異端。

軍に身を置く、自分。

冷たい目で、虫けらを見るような目でオレを見る両親の顔を思い出し、苦笑した。

——どうでもいいことなただけだな。

ああそれよりも、と真っ暗な空を見上げる。

今宵は満月。大きな大きなお月様が、昼は戦場であつたこの場所を照らす。

テントが張られ、見張りの兵士以外はもう眠りにについているであろう時間帯。

満月を見上げながら、「綺麗だな」と呟きをこぼした。

「何してるの？」

後ろから声がかかる。

影が歡喜にざわりと波打った。

振り向くと、一人の女が立っていた。

「……………姉貴か」

腰まで伸ばされた黒髪。強く意思を宿す黒い瞳。

自分の姉である、存在。

医者である姉は、オレのことが心配で軍に身を置いている。

自分を卑下するわけではないが、なんでこんなオレを心配してくれるのか、想ってくれるのかオレには分からなかった。

影が地面を侵食していく。

姉は自分の方に向かってくる影にくすりと笑い、「元気なのね」と言った。

地面に手を差し伸べると、影が応えるようにその手をさらりと撫でる。

喜んでいるのだろう。

オレと影は別物。

オレはオレで物を考え、影は影で物を考える。
生まれた時から一緒である『魔物』。

ペットにそうするように、手に触れる影を撫でた後、姉はオレを見た。

「月でも見てたの？」

言いながらオレの横にまで来た姉が、腰を下ろす。

医者だと主張するように着られた白衣を敷いているが、いいのだろつか。汚れてしまっんじゃないか。

目で問えば、それを精確に汲んでくれた姉は「大丈夫よ、代えはいっぱいあるもの」と言った。

そうか。代えがあるのなら、別にいいか。

そう納得する。

「明日は、移動ね」

「……………歩けるか？」

「あら。私、体力が無いと思われてるのかしら？ あなたよりかは無いけども、ついていけるだけの体力はあるつもりよ」

「……………そうか」

姉の身体を包み込むように懐く影。

横目でそれを見、顔を顰めた後空を仰ぐ。

月が、綺麗だ。

血を吸い込んだ地面を照らしている。

血を多く流させた己を照らしている。

平等に。何を思うでもなく、平等に。

もし、月を統治する神様がいたら、オレだけは絶対照らさないだろうな。

そんな馬鹿なことを考える。

オレは無神論者だ。神様の存在なんて無いと思っている。

けど、時々考えてしまう。

こういう、平等のものを覚えてしまうと無意識に思ってしまう。

——なんでオレに『平等』を与えるんだろうか。

それは、姉にも言えることだった。

姉はオレを忌み嫌うわけでもなく、ただ普通に接する。

親すら嫌悪する、魔力を持つ、魔物を使役するという異端な存在であるオレに、心配の念すら抱く。

よく分からない。

分からないが、それは不快なものではなかったので、オレはこのままでいいと思えた。

「ねえ」

姉がオレに顔を向け、オレは満月から姉に視線を移した。

「明日も、無事でいてね」

約束、と姉がオレに小指を突き出す。姉はいつもオレに指切りをせがむ。

家のような、平穏でオレに物理的な危害が加えられないであろう場所ではそんなことはしない。

今のような、平穏ではありえない戦場で、姉はオレと約束しようとする。

オレが、むやみやたらに敵に突っ込んでいくからだろう。

いつ死んでもおかしくない。

だから、姉はオレと約束しようとする。

『無理をしないで』

オレにそう約束させるために、姉は小指をこちらに差し出す。
オレはそれを見て、口角をひきあげる。

「しねえよ。そんなもん」

そう言うと、姉は傷ついたような顔をした。
だがそれも一瞬で、言われ慣れている姉は抗議するでもなく手を
下ろす。

沈黙がその場を支配する。
これは、いつもの光景だった。

なんでオレのことを気遣うのか、なんでオレのことを想ってくれ
るのかは分からない。
理解できない分、オレは誓う。

『無事でいよう。姉の下に帰ってこよう』

約束できない代わりに誓う。

言葉にすることなく、姉に伝えることなく自分勝手に誓いを立て、
オレはそれを忠実に守る。

影が姉に冷たくするオレに怒りを覚えたのか、オレの頬をぺしぺ
しと叩いてきた。

軽いが、うつとおしいそれに虫を払うように手を振る。

そんなオレの姿に姉が笑い、機嫌を良くした影が姉に纏わりつい
た。

「もうそろそろ、寝た方がいいんじゃないかしら？」

「そうだな」

姉の一言に立ち上がる。

影がオレに引っ張られするりと落ちた。

「おやすみなさい」

比較的近くに設置された姉専用のテントまで送る。
手振り付きの笑顔で言われた言葉に、オレもつられて笑みを浮かべた。

「おやすみ」

姉がテントに引っ込むのを確認し、自分のテントにへと向かう。
テントの入り口まで来たオレは一度止まり、満月を見た。

——綺麗だな。

オレは、自分が妙に感傷的になっていることに気がついた。

ああ駄目だ。これじゃあ駄目だ。
かぶりを振って、オレは自問自答する。

オレは誰だ。

『殺戮のアジタート』だろう。

それ以外の何者でもない。

オレには何も無い。

オレは呪いを唱える。

声に出さず、己の内で、子供の頃に自分で作った呪いを呟く。

【意味は無い。

理由は無い。

名も無く全てが無い。

在るのは強さ。

屠る強さ。

奪う力。

それだけが在り、それだけしか無かった。

両腕が双剣を振るい殺戮する。

影が両腕を振るい虐殺する。

血に塗れた両手が守るのは、唯一の肉親。

あとは何も無い。

その手が届く範囲は危険地帯。

無い、無い、無い。

オレには、何も無い。

何かがあつては、いけない】

殺せ。

己を殺せ。

何も無いオレは、何も望んじやいけない。

ただ、平穩が欲しいと思つてはいけない。

オレを傷つけない姉と、ただ平穩に暮らしたいなんて思つてはいけない。

ああ弱い弱い弱い。

こんなに弱くては駄目だ。

強くなてはいけない。

何よりも強く、誰よりも強く、畏怖される『魔物』でなくてはいいけない。

考えるな考えるな考えるな望むな望むな望むな望むな。

考えない代わりに狂え。望まない代わりに狂え。

狂うことが『魔物』らしくなるための行為であり、オレに課せられた行為だ。

人間であつてはいけない。

人間の形をした『魔物』にならなくては。

「……………はははは、」

頭を抱え、小さく笑いの声をあげた。

目を見開き地面を凝視する。

ざらりと地面を舐める黒。

ふ、と目を細めて、自嘲した。

「……バツカみてえだな、オレって」

狂えない。

狂ってしまったえば、完全な『魔物』と化してしまえば、姉を傷つけてしまう。

笑みを深くする。

……本当に、馬鹿みたいだ。

傷つけてしまうかもしれないと、それが怖いと思ってしまうなんて。

それはただの弱虫な子供の言い訳で、けどそれが自分であつて。弱い、弱い、弱い。強くあらなくては。

『魔物』になれないのなら、せめて強く強くどこまでも強くなくては。

影がずるりと地面を這う。

オレはそれを見て、苦笑する。

『殺戮のアジタート』

オレに名を与えたのは親でもなんでもない、敵。生まれた時から名は無く、疎まれてきた過去。

オレは姉の名を知らない。

両親がオレに名を告げることが禁止していたからだ。いつも傍にいてくれた姉は申し訳無さそうに微笑んでいた。

名が無いながらも無事成長できたオレは、軍に志願した。
そこならオレは『魔物』になれると思ったから。『魔物』のオレ
をうまく使ってくれると思ったから。

姉に決別の言葉を言った時、姉は迷うことなく己の名を捨て、オ
レと同じ軍に志願した。

弟のオレが心配だからと自分も軍に入ることを決め、音楽家にな
るという夢を捨て、戦えない代わりにと必死に勉強をして医者にな
った。

苦労しただろうに、姉はそんなことをおくびに出さずに言う。
これは自分がやりたかったことだから、と。

——馬鹿だよなあ。

空から目を離し、テントの中に入る。

影も同様に滑り込んで来て、真っ暗なテントの内側に張り付く。

「……おやすみ」

手早く寝る準備をしたオレは、影に向かってそう呟いた。
影が応えるように波打つ。

それを確認し目を瞑ると、姉の笑顔が瞼の裏に蘇る。

姉は笑う。オレとお揃いだ。と。名が無いオレと一緒にだと。

——馬鹿だよなあ。

嘲りではない微笑が浮かぶ。

オレは明日に考えを巡らせるでもなく、瞬時に眠りについた。

第一師団。通称『魔王軍』は、次なる戦場へと闊歩する。

魔王が率いると言われている第一師団に所属している一般兵であるその男は、並んで歩く二つの黒を斜め後ろから見ていた。

時折言葉を交し合う男女は、姉弟だ。身長差と着ているものの差異はあるものの、その後ろ姿はとても似ていると男は思う。

どちらとも腰まで届く黒髪。今は後ろを向いていて分からないが、正面に回り見れば、瞳の色も同じだということが分かるだろう。

自分を含めた周りの人間が全員鎧を着ているにも関わらず、二人は鎧を纏ってはいなかった。

黒と白。黒衣と白衣。

黒は、己が所属する第一師団が『魔王軍』と呼ばれる所以である人間であるくせに強力な魔力を持つ『魔王』。

白は、『魔王』の姉で、軍医だ。ちなみにこの姉は至って普通の人間。魔力は無い。

男は思考する。

斜め前にいる黒と白の会話を聞き、自分は今驚愕の思いを味わっていることに動揺している。

——多分、これは自分だけじゃないはず。

そう思い、目だけで辺りを見回す。

ガシャガシャと耳障りな音を鳴らしながら歩く人間の勢は、前を見据えたままだ。

誰も黒と白のを見ていない。

そのことに少し不安に思ったが、今の自分だって目だけで周りを確認しているのだ、周りの人間もそうかもしれない、と自分に言い聞かせ、無理矢理納得する。

視線を再び黒と白に戻し、二人の会話に耳を傾ける。

「今日は良い天気ね」

「暢気だな」

「そうね。でも、こういう時ぐらい暢気でいてもいいと思うのよ」

「まあ、姉貴はな。……オレは無理だな」

「いいじゃない。気を張らなくても。ほら、肩の力抜いて！」

「入ってない。つか、引っ付くな」

「いいじゃないいいじゃない。お姉さん甘えたいのよ」

「年を考えろよ」

「……………女の敵ね」

「……………悪い」

仲が良い姉弟の会話。

『魔王』との、普通の会話。

その事実が、一般兵である男を動揺させていた。

男は、『魔王』のことをよく知らなかった。

世間での『魔王』の評価は、夢物語に出てくるような、残虐非道な魔王そのままの印象で轟き遍っていた。

そしてその世間の評価は、第一師団内でも変わらないことだった。

ある日志願してきた一人の男は、ある日突然、地位は無いが異例で特別な階級——称号と言った方がいいか——を授かった。

階級名は『魔王』。

よく分からない階級名であるそれは、夢物語で語られる魔物の王を彷彿せざるを得ないもの。

よもや本物の魔王が？　と思う者もいれば、なんて馬鹿な階級名だ、と笑う者もいた。

自分は、確か後者の方だったか。

考え、ああやっぱりそうだ、自分は確かに嘲っていた、と思い出す。

だがその嘲笑は、最初に見た『魔王』の、その圧倒的な力を見せ付けられたことによって覆された。

一般兵である男は、その時のことを回想する。

今思い出しても身震いする。

高く築かれた城壁。滅多なことでは開かれない、巨大で磐石の門の前。

大きく開かれた門の入り口を、大勢の兵士達が塞いでいる。兵士達は隣の者となにやら言葉を交し合っていて、小さな声であるにも関わらずざわざわとさざめいていた。

その門の入り口から数十メートル離れた場所に、黒衣の男は立っていた。

獲物である双剣を手に持ち、真つ直ぐに的——我が物顔で外を練り歩く魔物——を狙う、鋭くも深く沈み込む混沌の黒の目。恐怖する対象である魔物を前にしても、顔色一つ変えない仮面のような表情。

兵士達は魔物を前にしている『魔王』を哀れに思った。その気持ちを隣の者と交換し、その考えを確固としていく。

まさか一人で魔物を殺すことのできる人間がいるとは夢にも思わない兵士達は、上司から命令された『魔王』が、ただの笑いの的のまま死んで行くことを気の毒に思った。

あんな大層な階級名を貰わなければ、ここで無駄に命を散らすことは無かったのに。皆、そう考え、同情の眼差しを黒衣の男に向けていた。

魔物は、動物達が凶暴化し、その凶暴さをもって人間を襲う種のことである。それと同時に、動物と違って刃が通りにくいことも特徴である。一見、動物と変わらないように見えても、魔物という種に突然変異してしまったものに戦いを挑むのは無謀というものだ。魔物の皮膚は、毛皮は、何かの力が働いているとしか思えないほど、強固だ。そして、魔物の一部には魔法を扱うものもあるのだ。

多勢に無勢でなら勝てるかもしれない。数の暴力でなら、人間にも勝ち目はある。だが、一人では到底。

そして、黒衣の男は動いた。

爆発的な速度で敵に向かったわけでもない。兵士達から見たら、非常に軽く緩やかな走りだ。

魔物が黒衣の男に気付き、石像がそのまま動いているような魔物が、黒衣の男を潰そうと両腕を振り上げる。

兵士達は、ああ、と息を漏らした。あの速度では、黒衣の男が魔物の前に達したまさにその瞬間に、魔物の腕が地面に着地するであろうことを、理解したからだ。

終わったな。誰かがそう呟き、そして次に見た光景に驚愕する。

黒衣の男は双剣の片方を、無造作に振るう。軽く、力があまりこもっていない、自然体からの薙ぎ。

軽いはずなのに、繰り出される斬撃は容赦が無く感じられた。目にも止まらぬ速度で剣を振るわれたような、そんな錯覚を起こすほどに時間の隙が無かった。観衆がその錯覚に目を取られている間に、黒衣の男の一振りによって両断された魔物の身体が、腕を振り下ろすことなく地面に倒れる。細身の剣が生み出したとは思えぬほどの結果。

人の平均身長より少し高めの魔物が、地面に倒れている。

魔物が、人間一人に、かくも簡単に敗れた。

その事実を目の前にした兵士達は、恐怖した。言い知れぬ恐怖感だった。

人間が、魔物に一人で勝つことなんてできない。それはどこの国でも同じなはずだ。それは、人間達の間では常識のはずだった。

その常識の中で、一人、常識に囚われず、細身の剣のたった一振りで魔物を斬り殺した人間。

『魔王』。

多くの人間を笑わせた階級名は、その時畏怖に取って代わったのだ。

男は回想から現実に意識を戻した。

周りでは相も変わらずガシャガシャと鎧が耳障りな音を立てている。

黒と白の後ろ姿。『魔王』と、『魔王』の姉。

「あんまり無茶しないでね？」

「別に」

「ああもう！ 姉さんの言うこと聞きなさい！」

「だから、別について」

「こういう時は『分かった』とか『大丈夫だ』とか『約束する』とか言うものなの！」

「別に」

「ああもう！」

じゃれあう二人。男の目から見てそれは、とても仲の良い姉弟として映る。

弟を想い気遣う姉と、それに応えたくても応えられない不器用な弟。

国のお偉いさんは、知っていたのだろうか。

身一つで魔物を打ち倒す強さ。それに上乗せして持つ、『影』のことを。

国のお偉いさんは、知っているのだろうか。

今ここで普通の人間と大して変わらぬやり取りを繰り返す、そ

の人格を。

もし全てを知っているのならなんて酷い人間なのだろう、と男は思った。

そんな自分の考えに、男は驚きに目を見開き、苦笑する。

軍に身を置く自分が言えた義理ではないのだが。

脳裏に掠めるのは、友人の一言。『お前は人が良すぎるし、理想論者なんだよ』と、そんな苦言だ。

——人が良すぎるというよりも、考えが甘いだけなんだけどなあ。

人格は普通の、そこらにいる人間と大して変わらない『魔王』を、可哀想だと思うだなんて。

力を持ってしまったが故に『魔王』と呼ばれている黒衣の男を、人間である自分と大して変わらないと思うだなんて。

——もしかしたら、名の如く悪の心を持っているのかもしれないのに。

そう考え、それはどうだろうかと自問する。

この二人の姿を見て、そう決定付けることはできない。

夢物語に登場する魔王とは違う姿。それだけを見ていたらただの人間にしか見えない、人間。

そして男は、ああ、と思い出す。

『殺戮のアジター』。

黒衣の男は魔王でなくても『殺戮のアジタート』なのだ。

男は頷く。そうだった、そうだったと何回も納得をするための相槌を打つ。

男はそこで考えることを止めた。

これ以上考えて、予測をして理想を築き上げるのは駄目だと思ったからだ。

黒衣の男と白衣の女から目を逸らし、男は前を見据える。

第一師団、その他にも続く軍は、他者が治める国へと歩を進める。『魔王』が、『殺戮』が加わったおかげで魔物を恐れることは少なくなった。

そのままの士気で、国を取るため多勢を率いて進んでいく。

視界の隅で男は見た。

白衣の女が何か言ったのか、黒衣の男が横に顔を向け一言呟く。

黒衣の男はぎこちなく笑い、白衣の女が肩を震わせる。

そんな光景を、一般兵である男は記憶から除外した。

黒衣の男は目を瞑り、ゆっくりと深呼吸をする。

両手には既に鞘から抜き出された白銀の牙。手に馴染むその感覚は、己の身体の一部。

凜と張る水面のように静まり返る胸中、男は思った。

今回も同じなのだろう、と。

それは諦めと似ている思いで、そしてそれはそうあらなければならぬものだった。

張り詰める水面に石を投じる。

波紋を広げ、ざわざわと感染する。

己は魔物。魔物になりきれない人間。人間を捨てたい人間。己の傍には魔物。魔物としか言い言えない魔物。憧れの影。頭の中で響く誓いの声は、何故か姉の声をしていた。そのことに笑みがもれる。

表だって約束はできないけれども、心の中で約束をしよう。揺れる水面が荒れていく。この感覚が好きだ、と黒衣の男は思った。

荒れた水底が、決壊する。

男が目を開くと、そこは戦場だった。

先ほどの静かな世界が嘘のように煩い光景。焦土のように何も無くただっ広い場所。怒号、雄叫び、血の臭い、乾いた空気、大気を震わせるべくの声、剣が矢が地面に刺さる音、ぎらついた目、生き残る意思、全てが煩い。

黒衣の男はそれに触発されるように醜く笑った。

男は駆ける。先陣をきる部隊にも追いつくほど速く。

男は振る。その両手に収められた白銀で死神の鎌を再現する。

男は笑う。醜く歪んだ笑みは白骨と化した死神の顔よりも生き生きとし、極上の料理と化した命を喰らう。

あれだけ煩わしいと感じていた悲鳴でさえも、徐々に男にとって身を奮わせるものとなっていった。

男の影は楽しそうに舞う男と共に踊る。阿鼻叫喚の空間が出来上がる。

黒衣の男の傍には味方は寄り付かない。近づけば自分がどうなってしまうのかを理解しているからだ。男の味方であるはずの兵士達は、遠く、戦っている。

男はそれを気にするまでもなく進む。血の道を、肉の壁を作っていく。

戦場を駆ける『魔王』は人々を殺戮していく。『殺戮』そのものである男の名を誰かが呼ぶ。男がそれに振り返り、恐怖に彩られた顔が近くにあることに気がつく、それに牙を食い込ませた。

次の獲物にへと目が移り、そこにもあった恐怖に白銀を振るった。美味だというように、早く喰らわせると一閃。

そして黒衣の男は目を見開いた。

恐怖に染まった顔は、原型を留めていた。男はその顔を両断するべく腕を振るったというのに。

肉を裁つ感触はしなかった。当たり前だ。その感触があつたのなら、今頃ここに顔は無い。

そして黒衣の男は、今更それに気がついた。

その顔を護るように横から伸びている鈍い色を放つ銀色を。

剣。しかもそれは普通のものとは違った、大剣。

遅く流れる時間の中、黒衣の男は目をその剣の根へと向ける。

そこには、赤があった。

その赤色が人間の瞳の色だと悟ると同時に、黒衣の男は勢いよく後方へと飛んだ。

爆音。

そのまま振り下ろされた大剣が地面を抉り、どんな原理か大剣に触れた地面周辺が炸裂した。

下から打ち上げられる大剣の切先をギリギリで避け、炸裂した地面から生まれた石礫が男を追う。

視界を庇うべく両腕を顔の前で交差させ、さらに後ろに飛びのくべく足を地面につけた男は瞬間、身体に走る悪寒に横に飛んだ。

爆音。

横目で見えた視界には、地面に叩きつけられる大剣。

その剣筋は黒衣の男が立っていた場所を真つ直ぐ断ち切る軌道。先ほどと同じく剣に触れた地面が爆発し、石が飛来する。

再度身体に走る悪寒。黒衣の男は無我夢中に後ろに飛んだ。

爆音。

爆音。

聴覚を攻撃する音が身体を貫く。握り拳大の石礫以上に大きな石が腹部を襲い、詰まる息が無理矢理吐き出され平衡感覚が狂う。黒衣の男はたまらず地面を転がり、だが一瞬にして立ち上がり狂う視覚で大剣の主を捜す。

大剣の主はすぐに見つけられた。

浅黒い肌の巨漢が、黒衣の男の前にいた。

黒衣の男は戦慄に目を見開き、その男から距離を取る。

浅黒い肌の巨漢は、太陽を凝縮したような赤い目を黒衣の男に向け、片方の口の端を持ち上げてみせた。

その巨漢は、黒衣の男とそれほど身長差は無い。だが筋肉を最大限にまで詰め込んだような身体が、その男を巨大に見せ、さらに人間が振るうには大きすぎる大剣のせいでそう錯覚させてしまうのだ。黒衣の男が警戒に巨漢を睨めつけている中、指が一本、立てられる。

「ひとつ！ 世に蔓延る悪を討ちー！」

指が二本に増える。

「ふたーっ！ まったくもって関わりたくないが国のために働きー！」

指が三本になり、

「みーっっ！ 気にいらねえやつをぶつとばすー！」

指が四本になる。

「最後ー！ 強い奴と、戦いてえー！」

指が全部立てられた。

「……嫌な目えしてやがるぜ。人を物のように斬り捨て、それを笑つてる輩なんぞ、俺が殺してやるよ」

まったく意味の分からない、何故言つたのかも理解できない口上に満足した男は笑い、肩に担がれていた大剣に開かれた五本の指を緩慢な動きで添える。

黒衣の男は自身の身体に駆け巡る悪寒に、知らず笑った。ざわざわと警告する直感。危険だと警報を鳴らすそれに、黒衣の男は心底で燦る熱にさらなる熱が追加される感覚を味わった。

その顔を見た浅黒い肌の巨漢は、忌々しそうに、だがこれから始まるであろう宴に歓喜の色を浮かべる。

二人を取り囲むように円を作る兵士達は、戦いを止め、二人の動きを一つも取りこぼさないといった風に凝視する。その周囲だけの戦場には不釣り合いな静寂。それは嵐の前の静けさか。

誰もが動けない静けさを破るのは影。黒衣の男の後ろで、人間で言えばうるたえていた影が黒衣の男の気持ちを汲み取るように声を上げた。

男とも女とも取れない、断末魔の悲鳴の如く甲高い声。

この世の果てに聞く地獄の鐘と似ているであろう声に、兵士達は耳を塞ぎ慄く。

二人はそれでも動かない。

両者共歓喜に顔を歪め、影の声など聞こえないといった風情で立ち尽くす。

——そして影の聲が已^やんだ時、二人の時間は動き出した。

黒衣の男は巨漢に背を向けるよう身を翻し、駈けた。

「は？」

巨漢の男は、己にただならぬ殺意を向けていた黒衣の男がまさか背を見せるだなんて思っていなかったため、間の抜けた声を出して呆ける。

周りの兵士達は『殺戮』がこちらに向かってきているという恐怖に、身を黒衣の男から離すように後ろに退げる。背に他の兵士がぶつかり、それでも後ろに。

そんな行動を、黒衣の男が走るであろう軌道上にいる全ての人間が取った。

人海を割り走る黒衣の男。

巨漢の男はどんどんと遠ざかっていく男の背を、やっと追いかけた。

黒衣の男が刃を持つ疾風なら、巨漢の男はさながら地響きを立て獲物を追う巨獣か。

巨漢からは想像もつかないような爆発力で男を追う。二人の間は埋まることは無いが、離されることも無い。黒衣の男は後ろに迫る巨大な気配に舌打ちした。

「おらおら逃げてんじゃねえぞーっ！」

身体を貫かんとする低く大きすぎる声。それから発せられる言葉を耳に、黒衣の男は双剣を強く握った。

黒衣の男は逃げているわけではない。力では間違いなく押し負けることを理解し、距離を置くために駆け、そしてその距離がこれ以上開かないことを悟ると同時に振り返った。

急停止すると影が周りの兵士達を両手で薙ぎ払う。赤が散らばる円形の空間の中、黒衣の男は告げる。

「影！ 纏え！！」

影はその言葉に笑った。地獄の鐘が歓喜に一声鳴き、人を薙ぎ払った両手を大きく振りかぶり、黒衣の男を背から抱きしめるように纏わりつく。

黒衣よりも純度の高い黒は、男を縛るようにその身体に巻きつき溶けていく。ざわり、と男の露出した肌に、剣の刃に、黒の波紋が這い溶けていく。

白銀の刃は影のように黒く染まり、月などの光源がまったく無い夜空を思わせる常世の闇に変わった。そこにあるのに視認が難しい、頭がそれを武器として理解できない闇だ。

笑う影がそこから無くなった。黒衣の男の周りの空気が張り詰め、迫る巨漢の男を意思の強い瞳で見据えた。

巨漢の男は明らかに何かをし終え待ち構えている男に構わずに突っ込んでいく。巨漢の男にとっては畏も仕掛けも何もかもどうでもいいことだったからだ。ただ気に食わない奴を自慢の相棒で叩き潰し叩き斬るだけ。

その相手が骨のある奴ならば、万々歳。腑抜けなら嘆息する。それ以上の望みも意味も無い。

長い間合いに、黒衣の男を捉える。巨漢の男は大剣を頭上高く持ち上げ振り下ろした。

数多の魔物や人間を潰してきたその大剣は寸分の狂いもなく黒衣の男を狙う。

黒衣の男は頭上で闇夜の双剣を交差させ、その場に留まった。

黒の瞳と赤の瞳が、互いを見合う。

赤の目は呆れに歪み、黒の目が自信に見開く。

誰にも何にも防がれることの無かった大剣は、闇夜の双剣の交差した部分を狙ったように落ちていき、触れ、金属が奏でる不協和音を響かせ、擦過し、摩擦で生まれた火花が爆焰を巻き上げ大剣を覆い尽くす。

黒衣の男は突如出現した熱源に驚き、バランスを崩した。

巨漢の男がそれを見逃すはずがない。そのまま力で押し切ることでも出来た大剣を躊躇無く振り上げ、焰を纏うそれは黒衣の男に向けて再度振り下ろされた。

爆音。

大剣が地面に着地し、爆発する。炎の礫が、赤が飛散する。赤共が単調な地面を彩っていく。

兵士達は息を呑んだ。人を物のように屠ってきた黒衣の男に叩き下ろされた大剣。大剣が地面につくよりも早く、黒衣の男の死に喜びの声をあげる者もいた。

誰もが黒衣の男の死を見た。

見た、はずだった。

大剣が突き刺さった場所には、何も無かった。

巨漢の男はそのことに寧猛に笑った。

抉れた地面に刺さる焰の大剣。振り下ろした体勢のまま赤の目を横にずらす。

近くに、無傷で悪魔のように笑う男が立っていた。

逸早く反応した巨漢が大剣を手放すよりも早く、一刃の風がその首を通り過ぎる。

びくん、と痙攣した巨漢はしばしの沈黙の後、ゆっくりと頭と身体をずらしていった。

頭が地面に落ち、身体がそれを追う。

勢いよく噴き出た血が地面を染めていく。焰を纏った大剣が、主の死と共に鎮火していった。

そして鎮火する焰に反比例するように、兵士達のざわつきが大きくなっていく。

兵士の一人の「あんなの、勝てるわけ」という言葉をきっかけに、その場が恐慌に陥った。

武器を手放し敵味方問わず押し合いへし合いながら遁走を試みる。だがそれも、混乱した兵士達が互いに逃げ道を塞ぎ合っているものでしかなかった。

その中で黒衣の男は口元に歪んだ笑みを浮かべながら立ち尽くしていた。

浅黒い肌の男の頭部に生える、日に焼けて痛んだ金髪が赤に染まっ

っていくのをただ見ている。
パシッとかかが破れるかのような音と共に、双剣の闇が取り払われた。再び男の後ろに控える影は、立ち尽くす男を心配げに影全体を揺らす。

黒衣の男は、高揚していた部分が途端に荒涼としたものに取って代わったことに、耐えている。

ぼそり、と自嘲するような色の言葉が漏れた。

「所詮、こんなものか……」

結局自分は魔物になるしかないのだ。

魔物のような強さ。人間が敵うわけのない魔物。

魔物しか己に敵うものはいない。

人間なんて、弱くて脆い人間なんて所詮。

失望と、強いと勘違いさせた巨漢の男への侮蔑。

八つ当たりといっていいそれを自分でも自覚しながら、これ以上のやる気が出せなくなった黒衣の男は双剣を収める。

踵を返して、己の所属する軍のいる陣に向かおうとした時、何かに足首を掴まれた。

驚いた黒衣の男は俊敏な動作でそこを見る。

浅黒い肌の手が、その足首を掴んでいた。

黒衣の男は一瞬何が起きたか分からなかった。

そしてその『何が起きたか分からない』といった感覚に既視感を覚える。

混乱するまま目で追えば、巨漢の男の身体がこちらに向いて黒衣の男の足首を掴んでいるのが見えた。

まさか、という呟きと共に転がっているはずの頭に目を向ける。

頭は笑っていた。獣のような獰猛な笑みで、ニヤニヤと笑っていたのだ。

しかもその生首は、あろうことが喋り始めた。

「やってくれんじゃねえーかよ」

「……なん、で」

「ああ？ 死んだと思ったのか？ おーおー、そうだな。お前から見たら俺は死んでるだろうよ。そりゃあもう完膚なきまでに死んでやがる」

「死なないのか」

呆然と言った。

喋る生首と会話するという、奇怪な構図。

黒衣の男の足首を掴んだままのっそりと起き上がる身体は、首無しだ。

身体が頭を手に取り、生首は豪快に笑って言う。

「ああ。俺は死なねえ。どうしようもねえ化け物さ」

巨漢の男の首が元の位置に戻され、足首を掴んでいた手が離される。

合図したかのように互いに後ろに飛び、両者獲物を手にする。

黒衣の男は凶悪に笑みを浮かべて、相手を小馬鹿にするように鼻をならした。

分かりやすい挑発に構うことなく、巨漢の男は首の動作を確認するように何回か首を回し、獣のように笑う。

「首を落として死なないのなら、細切れにすればいい」

「ほう？　それでも死ななかつたらどうするんだよ」

「跡形も無く潰すか燃やすか、……まあいい。楽しくなりそうだ」

「そこんとこだけは同感だ。^{どーかん}不意打ちや卑怯な手以外で死んだのはこれで初めてだしよあ。ま、楽しもーぜえ！」

ゆるりと大剣を構える。

黒衣の男も双剣を抜き、「纏え」と発すると闇が再びその手に収まった。

そして黒衣の男はいきなり巨漢の男に向かって走り出した。

間合いを詰め双剣を駆使し相手の命を屠らんとする。

巨漢の男はそれに黙って従うはずもない。そのまま大剣を地面に打ちつけ摩擦で燃え上がる焰を纏い、その場で縦にぐるりと回って頭上から大剣を叩き落す。

黒衣の男は、今度はそれに怯みはしなかった。

リベンジするためか先ほどと同じように双剣を交差させる。

普通なら、その大剣を真正面から受け止めただけで数多の人間の身体は——黒衣の男も例外なく——容易く碎けるものだ。

受け止めるものではない。

だが、影を纏った黒衣の男は、影によって全てを強化されている。剣の強度も身体の強化も、身体能力も向上している。

だから黒衣の男は巨漢の男の大剣を受け止められる。

人間には遠く、魔物に近い、今の黒衣の男。

そしてそれと同等、あるいは黒衣の男以上の化け物である巨漢の男。

大剣がけたたましい音と共に受け止められ、黒衣の男の身体を砕くことなく、男の両脚が僅かめり込むだけに終わる。

闇が熱を吸収しているのか、はたまた跳ね返しているのか、熱は黒衣の男に届かない。

巨漢の男は不敵に笑い、蹴りをその胴に繰り出した。黒衣の男は蹴りと同じ方向に身体をずらし、大剣をいなす形で避ける。

大剣は着地することなく無理に戻され黒衣の男を追う。その速さは、無理な方向修正だったにも関わらず、普通に大剣を振るっている時との差異があまり無い。

それを難なく避け、黒衣の男は高鳴る気持ちに剣を振るい舞い踊る。

同等。それはなんて甘美な響きか。

下であるか上であるかしかなかった世界に、同等が現れた。

己を虐げない。己に殺されない。魔物であるべき己と剣を交わす『人間』。

そんなこと夢でも見ず夢でも驚くことだ。

なのにそれは夢でもなく妄想でもなく現実で起こっている。

黒衣の男は自分以外の化け物がいることが、この上なく嬉しかった。

「づあーっ！　ちょこまかと鼠かゴキブリかハエかオメエー！！」

「皆俺のこと『殺戮のアジター』だとか言ってるぞ！　下等動物と一緒にするな！」

「あゝあー！？　んな大層立派なもん、オメエには似合わねえよ！　黒いからゴキブリだゴキブリ！」

「じゃあお前はゴリラだな。しかもモテない」

「うるせえー！！　ゴキブリ如きが人様の傷を抉ってんじゃねえーよー！！」

「なんだそれ！　凶星か！？　……はは、あつははははっ！」

「デメエー！！」

黒衣の男に顔に浮かぶ笑みが、凶悪な色から年相応の純粋な色になる。

巨漢の男はそれに一瞬気を取られた。今まで悪魔のように、まさしく『魔王』のように不遜に極悪な笑みを浮かべていた男の顔に、まさかそんなものが浮かぶとは思わなかったからだ。

黒衣の男はそんな巨漢の男の隙を見逃さない。するりと流れる水のように男の懷に潜り込み、心臓に両方の闇夜を突き刺す。

それで巨漢の男が死ぬわけがないので、すぐさま双剣を挟り引き抜き距離を取る。

あまりの手際の良さに巨漢の男はぎょっとした顔で目を開き、次は憤怒に吼えた。

「こ、んのクソガキがああああっ！！」

死なないとは言っても、痛いものは痛いのである。

胸から流れる血を放って、大剣を地面につけたまま自分を中心に円を描くように回る。

大剣に触れた部分で爆裂が起こり、炎に包まれた石礫が弾け飛ぶ。

大剣の軌道は円の始点につくことはなく、上半身を捻るようにし大剣がさらに地面に決りこまれ、黒衣の男に向かって打ち上げられた。礫とは比べものにならない、炎を纏った岩が飛ぶ。

黒衣の男はそれを危なげに避けた。熱風に顔をしかめる。突撃してきた巨漢の男を迎え撃ち、刃が交わされる。

怒りの形相だが、巨漢の男も楽しんでいるようだ。

互いに命を狙う攻防が交わされ、観客も無く自分達だけの舞台で二人は遊んでいた。

物騒な遊び。黒衣の男は、心配性な姉が知ったら怒るだろう、と隅で考えて綻んだ。

何度目かの打ち合い。刃を受け止めぎりぎり押し合う。

相手の顔を睨むと両者共笑っていた。獰猛に、凶悪に浮かぶ中で、楽しみの色がある。

疲労はもちろんある。だがそれは瑣末なことだ。動きが鈍ろうとも、集中力は欠けない。楽しいものの前で他に気を逸らすなどと、侮辱を極めることはできない。

両者、ボロボロの身体を厭^{いと}うことなく、目の前の楽しみを大いに楽しんでいた。

——そしてそれが投じられ、気付いた二人はそこから飛び退いた。

今まで二人が睨み合っていた場所に、ザッ、と音を立てて槍が突き刺さる。

矢をそのまま巨大化させたような粗末な槍。巨漢の男は興を削いだそれを激怒に咆哮を上げ叩き折った。

「あゝあーっ！？ 誰だこんなことしやがる奴、ぶっ殺してやる！」

二人はそれが投じられたであろう方へ目をやった。そして、焦土の様を呈したただっ広い場所を囲むようにしてそこにある、岩肌むき出しの小さな山のてっぺんにあるそれを、見つけた。

白馬に乗った純白の甲冑が一つ。いや、中に人がいるだろうから騎士か。

全身を完全に覆うその姿に、動かなければ甲冑だけが馬に乗っているような、そんな滑稽な印象を二人は持った。

二人が訝しげに眉を顰める中、抜かれた純銀の剣がゆるりと持ち上げられ、その先を二人に向けた。
通る凜とした男の声が、叫ぶ。

「『魔王』を捕らえろ！！」

その言葉に、地が鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7268n/>

別たれた姉弟は今生で相目見えることは無いわけで

2011年4月6日22時11分発行